

麻痺性疾患 2

座長：松 山 敏 勝

本セッションは5題の演題が発表された。1題目は、神奈川県立こども医療センターの中村直行先生より麻痺性脊椎側弯の学齢児への Dynamic Spinal Brace の治療経験の報告であった。側弯改善は乏しいものの、40°以下の早期側弯に対する進行予防効果の可能性が述べられた。従来の硬性体幹装具との相違について質疑があった。治療効果には大きな差はないが、介助者での満足度が高いこと、製作業者の対応が重要であることも述べられた。開発された南大阪療育園の梶浦先生からもコメントがあり、本装具の開発のコンセプトや今後の改良の必要性が述べられた。2題目の沖縄県立南部医療センターの金城健先生からは、南部医療センターを中心とした沖縄県内3箇所の肢体不自由児施設とのチーム治療システムの紹介があった。各種痙縮治療の選択で職種により意見の相違があった場合には、どのように対応しているかの質問があった。最終的にはコーディネーターである整形外科医が決定していると述べられた。3題目は北海道立子ども総合医療・療育センターの藤田裕樹先生から、脳性麻痺痙直型両麻痺に対する腓腹筋延長術前後の歩行分析から、術前後での膝、足関節可動域の改善が定量的に評価できること、術後に足関節モーメントでより生理的な底屈力が生まれることが報告された。今後の術式の選択や改良に関しての具体的な評価手段になり得るかとの質問があったが、今後の課題であることが述べられた。4題目は、兵庫県立こども病院の小林大介先生から、二分脊椎児の48例75足の麻痺性内反足に対する手術内容の解析と平均5年の術後評価があった。生下時からの変形では再発リスクが、遅発群では逆変形のリスクの頻度が報告された。5題目の心身障害児総合医療療育センターの田中弘志先生からも、二分脊椎の内反尖足への前脛骨外方移行術22例の報告があった。小林先生と同様に逆変形の報告もあり、弛緩性麻痺での足部変形の経年的変化に対応する初期治療の難しさがあらためて共感された。会場からは術式の工夫や改善法などが質疑された。どの演題も内容があり、質疑が活発であり、時間に制限があるのが残念な印象であった。